

不屈の海4

ソロモン沖の激突

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地図・図版 安達裕章
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	蒼空の追跡者	9
第二章	第三帝国の翳 ^{かげ} り	47
第三章	遠過ぎた船団	83
第四章	機動部隊、南へ	101
第五章	西の剣風 ^{けんふう} 、東の魔女 ^{ヘルキヤット}	135
第六章	復活の咆哮	241

南太平洋



ソロモン海周辺図



不屈の海
ソロモン沖の激突

4



第一章

蒼空の追跡者

1

「後方より零戦！」

尾部銃座の射手を務めるロイ・キャンピオン軍曹の声が、インカムを通じて伝わった。

「来やがったか、腐肉獣どもめ！」

第一七九爆撃飛行隊^{179B}の第一中隊三番機で、機長と主操縦士を兼任するアーチャー・マリOTT中尉は、吐き捨てるように叫んだ。

一九四三年二月五日。

179BSと第一八一爆撃飛行隊^{181B}を合わせて九四機のボーイングB17¹ フライング・フォートレス²が、トラック環礁^{かんしやうウアン}、冬島^{ふゆしま}、楓島^{かへしま}の日本軍飛行場を爆撃した帰路だ。

この日の爆撃行で、マリOTTのB17は、爆撃手を射殺された上、四番エンジンに被弾した。火災は鎮火したが、エンジンは停止している。

現在は、三基のエンジンで飛行している状態だ。

高度二万フィートを保つよう努めているが、ともすれば高度が下がりそうになる。

青息吐息の状態にあるのは、マリOTT機だけではない。

ジークや、昨年九月よりトラックに配備された新型戦闘機——合衆国のコードネーム「鍾馗^{トウジョウ}」の猛攻により、一〇機以上が墜とされ、マリOTT機も含めて一八機が被弾損傷した。

損傷機は現在、味方機より大きく遅れて、ニューブリテン島ラバウルへの帰還を目指している。

その被弾機に、ジークが追いつがって来たのだ。

マリOTTは、エンジン・スロットルを開いた。

健在なエンジン三基の唸りが高まり、B17が加速された。

最大時速は五二〇キロだが、今のマリOTT機に、それだけの速力を出せない。エンジン一基が停止している上、外板の損傷に伴う空気抵抗の増大もある。

現状では、四〇〇キロが精一杯だ。

『『スピード3』より全機！ 待ってくれ、みんな！ 置いていかないでくれ！』

泣き声のような声がレシーバーに入る。

第二中隊三番機の副操縦士ステイブ・リード軍曹の声だ。

コクピットに被弾し、機長を射殺された上、エンジン二基が損傷している。

単機で、敵中に取り残されようとしているのだ。

「助けてやりたいが、どうにもならん」

マリオットは、隣席に座る副操縦士のバート・コリンズ伍長と顔を見合わせ、かぶりを振った。

戦友を見殺しにするのは忍びないが、今はこちらが生き延びられるかどうかの瀬戸際なのだ。

『『スピード3』被弾！ 高度下がります！』

尾部銃座のキャンピオンが報告して来る。

僚機や追って来るジークの姿がはつきり見える位置だ。機体の後部を守るといふ大事な役目だが、

このような状況下では、最も辛いポジションだ。

『『スピード3』墜落！』

キャンピオンの悲痛な声が伝わった。

マリオットは、胸の前で十字を切った。

リード軍曹はジークから逃れるべく、懸命に機体を操り続け、各機銃座の射手も最後まで射撃を続けたであろうが、虚しい努力に過ぎなかったのだ。

「ジーク、追って来ます。機数約二〇！」

「戦友を悼んでいるどころじゃないな」

キャンピオンの報告を受け、マリオットは唸り声を発した。

一機を仕留めた程度では、ジークは満足しない。

視界に入るB17全てを墜とすか、弾切れにならない限り、追跡が止むことはない。

B17クルーの中には、トラックから二〇〇哩以上離れた海面まで、ジークの執拗な追跡を受け続けた者もある。

飢えたコヨーテを思わせる執念だ。

「ジーク、『スピード2』を攻撃中！」

「ジーク、『ダイヤ4』に取り付きました！」

キャンピオンの報告に、コリンズの声が重なった。標的になったのは、第二中隊の二番機と第一中隊の四番機だ。

マリオットは、首を左に向けた。

第一中隊の四番機に、ジーク二機が後方から射弾を浴びせている。

「ダイヤ4」の反撃はない。胴体上面の旋回機銃座も、尾部銃座も、既に破壊されているのかもしれない。

「ジム、マイク、『ダイヤ4』を援護しろ！」
えんご

マリオットは、胴体上面と左側面の旋回機銃を受け持つ二人の射手に命じた。

かんぱつ
間髪入れず、後部から連射音が伝わった。

ジム・ファアガス伍長が胴体上面から、マイク・ローマン一等兵が左側面から、それぞれ一二・七ミリ弾を放ったのだ。

「ジーク、左後方！」

「ジム、目標を左後方の敵機に変更しろ！」

キャンピオンの叫びを受け、マリオットはファアガスに命じた。

戦友を助きたい気持ちはあるが、優先すべきは自分たちの機体だ。

マリオットは、ステアリング・ホイールを左へ、次いで右へと回す。

爆弾を投下し、身軽みがるになつてはいるが、B17の動きはお世辞せじにも敏速とは言えない。

二七・二トンという全備重量もあるが、エンジン一基が停止していることも、運動性能を低下させている。

左に、右にと旋回しつつ、マリオット機は後方に射弾を放つ。

不気味な打撃音がコクピットに届く。
機体のどこかに、敵弾が命中したのだ。

「エンジンに異常なし！」

「了解！」

コリンズが計器をチェックして報告し、マリオットはごく短く返答する。

「『ダイヤ4』 火災！」

ファーガスンが悲痛な叫び声を上げた。

マリオットは左方を見やったが、第一中隊の四番機は視界に入って来ない。

自分の目に入らない場所で、一〇人の戦友が逝こうとしている。

「ジーク、前方に回ります！」

ファーガスンが注意を喚起した。

コクピットの真上をかすめるようにして、青白い射弾が前方に飛んだ。胴体上面の旋回機銃座が火を噴いたのだ。

一二・七ミリ弾の火箭が振り回される。

野生馬を捕らえようとする投げ縄のようだが、ジークがそれに捉えられることはない。

右に、左にと旋回し、銃撃をかわしながら、マリ

オット機との距離を詰めて来る。

マリオットは敵機の照準を外すべく、ステアリング・ホイールを不規則に回す。

B 17の巨体は、振り子のように振られるが、巨大な四発機の動きは悲しくなるほど鈍い。

前方に回り込んだジーク二機が、続けざまに射弾を放った。

右主翼の三番エンジンに真っ赤な火箭が突き込まれ、僅かに遅れて、左主翼の一番エンジンにも敵弾が突き刺さった。

三番エンジンのカウリングが引き裂かれ、裂け目から火焰が噴出する。

一番エンジンも、プロペラが止まる。

三基のエンジンのうち、二基をやられたB 17は、急速に高度を落とし始めた。

「脱出だ！ 全員、脱出しろ！」

マリオットは、まだ生きているインカムを通じて全クルーに命じた。

コリンズが副操縦士席から離れ、マリオットも続いた。

機首が下がり、胴体の床面が急坂と化す前に後部に移動し、機外に脱出した。

飛び降りた直後、凄まじい風圧に全身が引つ摺まれ、空中で二転三転する。自分たちがこの直前まで、分厚い装甲板によつて守られていたことを実感する瞬間だ。

一〇秒数えて、落下傘を開く。

全身に上向きの強烈なGがかかり、降下速度が急減する。

白い落下傘が頭上に広がり、マリオットの身体は風に吹かれて漂い始める。

一〇人以上のB17クルーが、落下傘降下中だ。

何人が生きてラバウルに戻るかは、まだ分からなかった。

「生存者なし……か」

ガトー級潜水艦「トリガー」の艦長リチャード・ハミル少佐は、海面の様子を見て呻き声を上げた。

「トリガー」は、不時着したB17クルーを救助するため、合衆国海軍がビスマルク諸島とトラック環礁の中間海面に配置した潜水艦の一隻だ。

「我、ジークの追撃を受く」

との緊急信を受信したため、戦場付近の海面に駆けつけたのだ。

位置は、トラック環礁ウマン島よりの方位一八〇度、八〇浬。

海面には、空気が抜けた落下傘やライフボート等、友軍機が墜落、もしくは不時着水した名残が漂っている。

B17クルーの姿は見えない。

ライフボートの多くは空気が抜けており、中には血に染まっているものもある。

何が起ったのかは、だいたい想像が付く。

墜落機から脱出したクルーを、鯨が襲ったのだ。

血の匂いを嗅ぎつけた死神の顎に捉えられた瞬間、クルーが感じたであろう恐怖と絶望を想像すると、暗然と我知らず体が震えた。

「艦長、救助要請を受信しました。ウマン島よりの方位一八〇度、九五渾です」

「了解した。針路一八〇度」

航海長テッド・ルーカス大尉の報告を受け、ハミルは変針を命じた。

生存者がいない以上、この海面に用はない。一人でも多くのクルーを助けることに、力を注がねばならない。

艦が南下を開始したとき、ハミルは今一度海面を眺め渡した。

波間に漂う浮遊物は、次第に小さくなり、やがて海に溶け込むように消えていった。

2

推進機音は、左正横から近づいて来た。

潜水艦の発令所では、細かく砕いた氷を耳元でかき回されるような音に聞こえる。

涼しげな音ではあるが、潜水艦の乗員にとっては、死神の足音に等しい。

陸地に近く、水深が浅いため、深みに潜ってやり過ごすという潜水艦の得意技は使えない。

発見されたら、撃沈されることは確実だ。

「さすがに警戒が嚴重だな」

呂号第一三一潜水艦の水雷長を務める相坂吾一大尉の耳に、潜水艦長沖英介少佐の小声が届いた。

現在位置は、ニューブリテン島カラビア湾の湾口沖五渾だ。

ビスマルク諸島における米軍最大の航空基地ラバウルの表玄関とあって、警戒は厳しい。

駆逐艦^{くちくかん}の他、駆潜艇^{くせんてい}、哨戒艇^{しょうかいてい}といった小型の対潜艦艇が常時五、六隻貼り付き、海中から忍び寄る刺客^{しかく}に目を光らせている。

潜水艦といえども、このような海面に進入するのは自殺行為に等しい。

だが、呂一三一は任務の特殊性故^{ゆえ}、カラビア湾口まで進出する必要があった。

推進機音は、呂一三一の頭上を左から右に通過してゆく。

推進機音が聞こえなくなっても、沖はすぐに命令を出さなかった。

敵艦との距離が充分開いたと水測長^{すいそくちやう}が判断しない限り、艦を動かすことはできない。

一〇分ほどが経過したところで、水測員の小山田憲^{けんいち}二等水兵が、足音を忍ばせながら発令所に来た。

「伝令。敵艦の推進機音、失探^{しつたん}。本艦との距離は五〇^{マル}(五〇〇〇メートル)以上と見積^みもられます」

直立不動の姿勢で敬礼し、囁^{ささや}き声で報告した。

「後進^{びぞく}微速」

沖が、機関長金沢誠^{かなざわまこと}大尉に命じた。

呂一三一は針路を九〇度、すなわち真東^{まひがし}に取っている。湾口に接近するためには、後進をかける必要があるのだ。

若干の間^まを置いて、艦が僅かに身震^{みふる}いする。

何メートルかを後ろ向きに移動したかと思うと、減速し、数秒後に停止する。

敵に推進機音を聞き取られないため、微速で後進した後、惰性^{だせい}で艦を動かすのだ。「ドン亀^{がめ}」という渾名^{あだな}通りの、ゆっくりした動きだ。

「臆病^{おくびよう}なぐらいで丁度^{ちやうど}いい」

というのが、沖の口癖^{くぐくせ}だった。

前進と停止を一〇回以上繰り返し、

「湾口まで三湮」

航海長の新田司大尉^{にったつかさ}が報告したとき、

「伝令。本艦前方より推進機音。艦艇多数。距離一五〇^{マル}(一万二〇〇〇メートル)」

一旦水測室に戻っていた小山田二水が報告した。

「機関停止。無音」

沖が即座に下令し、推進機への動力が切られる。

「艦長、ここで敷設しましょう」

艦が停止したところで、相坂が具申しした。

「ここですか？ 少し早過ぎないか？」

沖よりも先に、新田が疑問を提起した。

階級は同じ大尉だが、新田の方が先任であるため、上位者の話し方になっている。

「水測室が探知した目標は、ラバウルに物資を運んで来た船団である可能性大です。ここで敷設すれば、多数の輸送船を物資ごと一網打尽にできます」

「危険ではないか？ 戦果は上げられるかもしれないが、本艦も敵の護衛艦艇に発見され、攻撃を受けるかもしれない」

「敷設後に、船団の真下を抜けます。敵艦の推進機音に紛れて脱出できますよ」

「……やろう」

相坂と新田のやり取りを聞いていた沖が、重々しい声で断を下した。

「敵は目の前にいる。仕留めるための武器もある。

千載一遇の好機を逃すべきではない。水雷、機雷敷設準備。二〇一六（日本時間。現地時間二一時一六分）より敷設を開始する」

「機雷敷設、準備します」

相坂は復唱を返し、伝令兵の森崎真吾二等水兵に命じた。

「機雷長に伝令。『機雷敷設準備。敷設数三六。敷設間隔二〇秒。発動二〇一六』」

「機雷敷設準備。敷設数三六。敷設間隔二〇秒。発動二〇一六。機雷長に伝えます」

森崎が復唱を返し、発令所から駆け去った。

現在、時刻は二〇時一四分。

二分後には、呂一三一が艦の後部に抱えて来た三六個の機雷が、ラバウルに補給物資を運んで来た輸送船の船底を食い破るべく、海中に放たれる。

（海軍が、もう少しこの戦術に力を入れてくれればいいんだが）

腹の底で、相坂は呟いた。

相坂は江田島卒業後、水雷を専門に選んだが、水雷学校で学んだとき、

「機雷戦の研究を希望します」

と述べて、教官や同期生から変人扱いされた。

機雷戦の研究などしたところで、待っているものは掃海艇や敷設艦の艦長という地味な役どころであり、栄達とはほど遠い。

そのような道を好んで歩むとは——と、多くの者が好奇の視線を向けた。

だが日本海軍は、日露戦役において機雷の有効性を実証すると共に、機雷の怖さも味わっている。

同戦役において、日本軍はロシア戦艦「ペトロパブロフスク」を機雷によって撃沈し、ロシア太平洋艦隊司令長官ステパン・マカロフ中将を戦死させたが、日本側も主力戦艦の「初瀬」「八島」をロシア

軍の機雷で失ったのだ。

現在では、機雷そのものも進歩しており、艦船の音や艦体を持つ磁気に感應する機雷、それらを組み合わせた機雷が出現している。

相坂は、戦史や諸外国における機雷戦の研究成果を調べ、何度も海軍中央に報告書を提出した。

新米士官の報告など、どこまで取り上げられるだろうか。まして機雷戦などという出世に縁のない道を選んだ者の主張など——と思ったが、相坂の主張に耳を傾けてくれる者が軍令部におり、海軍中央に働きかけてくれた。

その時点で、帝国海軍は四隻の機雷敷設潜水艦を配備していたが、昭和九年度計画で、新たに機雷敷設潜水艦六隻の建造が決定されたのだ。

その一隻が、相坂が水雷長として乗り組んでいる呂一三だ。

伊号ではなく、中型潜水艦の呂号第三三型潜水艦をベースに設計され、艦尾に機雷敷設筒二基を装備

し、機雷三六個を搭載する。

呂三三型は、全長七メートル、最大幅六・七メートル、水上排水量七〇トン、水中排水量一二〇トンだが、呂一三一型はやや大型化し、全長七九メートル、最大幅七・二メートル、水上排水量九三〇トン、水中排水量一三七〇トンとなっている。

姉妹艦五隻のうち二隻は、昨年三月、真珠湾口への機雷敷設作戦で失われたが、他の三隻は健在であり、ビスマルク海方面の作戦に投入されている。

呂一三一型を束ねる第五一潜水隊の司令有沢幸太郎大佐は、

「輸送船を標的とするのは物足りないかもしれないが、戦略的には非常に重要なのだ」

と伝えて来たが、相坂は物足りないとは思っていない。

機雷の有効性を海軍中央に理解させるには、格好の目標だ。

「前進微速」

「機雷敷設始め」

二〇時一六分、沖艦長が予定通りに下令した。機関音が高まり、呂一三一がゆっくりと前進を開始した。

魚雷の発射とは異なり、機雷の敷設は静かだ。

後部の敷設筒から、音が伝わって来ることもない。ただ、伝令の報告によって知るだけだ。

二分ほど前進を続けたとき、

「前方より推進機音。護衛艦艇らしい」

「機関停止。無音」

小山田二水の報告を受け、沖が命じた。

推進機に伝える動力が切られ、艦は数秒後に停止する。

「敷設止め。前進再開後に、作業を再開する」

「『敷設止め。前進再開後に作業再開』。機雷長に伝えます」

命令を受けた森崎二水が、後部の機雷室に走る。しばし、沈黙が発令所を支配する。

「現在までに一六個、敷設完了」

森崎が機雷室から戻って報告するが、それも相坂の耳元に口を近づけての囁きだ。

甲高い音が、艦外から伝わって来る。敵艦が、音波探信儀で潜水艦の有無を探っているのだ。

探信音に混じって、推進機音も聞こえる。

船団より先行した護衛艦艇——おそらく駆逐艦が、カラビア湾口へと向かっているのだ。

敵艦が、探信音を放ちながら呂一三一の頭上を通過する。

潜水艦乗りにとり、何よりも恐怖を感じる一瞬だ。水測室から「着水音多数」の報告が届くのではないかと気が気ではない。

音は後方へと抜け、次第に遠ざかってゆく。

敵艦は、呂一三一を探知できなかったようだ。海底すれすれの場所で懸吊していたため、海底の凹凸と区別がつかなかったのかもしれない。

「前進微速」

沖が下令した。

呂一三一が、ゆっくりと前進を開始した。

数秒間前進したかと思えば、動力が切られ、艦はほどなく停止する。

「新たな機雷、二個敷設」

森崎が報告したところで、再び「前進微速」が命じられる。

呂一三一は前進、停止を繰り返す。

前進を再開するたびに、機雷が敷設筒から放たれ、海中に漂い流れてゆく。

後方から、炸裂音が届くことはない。

駆潜艇や哨戒艇のような小艇ではなく、積み荷で喫水が深くなっている輸送船を仕留めるため、浮遊深度を深めに調整しているのだ。

「前方に推進機音。音源多数。距離六〇（六〇〇〇メートル）」

小山田が、水測長の報告を伝えた。

「水雷、機雷の残りは？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。